「ナケレバヤマナイ」と近代当為表現諸形式との関係

西　山　由　倭

はじめに

芥川龍之介『手巾』に次の場面がある。

現在、ストリントベルクさえ、先生は、中途でやめなければならなかった。なぜかといえば、突然、訪客を告げる小間使が、先生の清興を妨げてしまったからである。世間は、いくら日が長くても、先生を忙殺しなければ、止まないらしい……

（芥川龍之介『手巾』1916）

この中で、稿者は、現代では使われない「なければ、止まない」という部分に着目した。

「やむ」という語は『日本国語大辞典』で以下のように意味分類されている。

(1)　続いていた自然現象の動きが消えてなくなる。風波、雨、雪などがおさまる。

(2)　物事が途中で行われなくなる。続いてきたある状態がとだえる。

(3)　事をしないでおく。

(4)　物事にきまりがつく。事が終わりになる。

(5)　高まった気持や、病気などがおさまる。

(4)の用例として、上記『手巾』の例が挙げられていた。他の(4)の用例には、古いものとして『平家物語』があった。

六月十日の牒状、同十六日到来、披閲のところに数日の鬱念一時に解散す。凡平家の悪逆累年に及で、朝廷の騒動やむ時なし。　（『平家物語』巻第七）

ここでの「やむ」は騒動が終わるという意味で使われている。しかし、それに比べて『手巾』の用例では何が「止まない」のか不明瞭である。そこでこれを(4)のようにヤム単独の語法変化として捉えるのではなく、「なければ、止まない」ひとまとまりで「せずにいられない」といった意味を表すという、近代の連語諸形式の問題として考えることとした。似たような意味の連語に「してやまない」[1]があるが、「ナケレバヤマナイ」

との違いとして、動作が繰り返されているか１回きりであるかという点が挙げられる。『手巾』と同年代の用例を見てみよう。

（1a）運命の擒縦を感ずる点において、ドストイェフスキーと余とは、ほとんど詩と散文ほどの相違がある。それにもかかわらず、余はしばしばドストイェフスキーを想像してやまなかった。（夏目漱石『思い出す事など』二十一　1910-11）

（1b）それが私をちょっと感心させたので、私はつい短冊へ句を書いて送る気になった。しかしその贈り物は彼を満足させるに足りなかった。彼は短冊が折れたとか、よごれたとかいって、しきりに書き直しを請求してやまない。

（夏目漱石『硝子戸の中』十三　1915）

（1a）は「しばしば」、（1b）は「しきりに」という複数回動作が行われたことを表す語が合わせて使用されている。一方で『手巾』の「世間は、〈略〉先生を忙殺しなければ、止まないらしい」は、「忙殺」自体が非常に忙しくさせるという一定の時間を要する行為であり、その事態が一日の中で何度も繰り返されるとは考えにくい。このような差から、両者ともにセズニハイラレナイと置き換えられそうだという点で接点はあるが、やはり意味は異なるといえる。

そこで、「ナケレバヤマナイ」を、現在使用されている「なければならない」や「なければいけない」といった当為表現[2]の成立と関わりのあるものとして位置づけてみる。

１．選択可能性とスタイル

当為表現の中でも、「ナケレバナラナイ」と「ナケレバイケナイ」に関する先行研究の指摘は「選択可能性とスタイルという２つの基準によって整理できる」と津田（2015）[3]は述べている。そして、津田（2015）によれば、「選択可能性とは、当為表現におかれた命題部分が、動作主の主体的判断によって選択されうる性質である。ナラナイ系は、選択可能性がないかあるいは低く、命題を絶対的と捉える。それに対してイケナイ系は、選択可能性が高く、事態に関して動作主がその状況や立場などに照らして、「どうすることが必要か、また最も望ましいかといった点からの判断を表しているという傾向が見られる」」。本稿では、「なければやまない」の選択可能性を考察した後、近代の例文を用いて、改めてナル系・イク系の選択可能性についても調査していくこととする。

２．ナケレバヤマナイにおける選択可能性

まず、年代順に用例を見ていく。

2.1 〈ネバヤマヌ〉形

(2a) 禅家では柳は緑花は紅と云う。あるいは雀はちゅちゅで烏はかあかあとも云う。謎の女は烏をちゅちゅにして、雀をかあかあにせねばやまぬ。謎の女が生れてから、世界が急にごたくさになった。　(夏目漱石『虞美人草』十　1907)

(2b) 後患は遺さない。趣味の堕落したものは依然として現存する。現存する以上は堕落した趣味を伝染せねばやまぬ。彼はペストである。ペストを製造したものはもちろん罪人である。　(夏目漱石『野分』五　1907)

(2c) 世間は自分を病気にしたばかりでは満足せぬ。半死の病人を殺さねばやまぬ。高柳君は世間を呪わざるを得ぬ。　(夏目漱石『野分』八　1907)

(2d) 理想のあるものは歩くべき道をしっている。大なる理想のあるものは大なる道を歩く。迷子とは違う。どうあってもこの道をあるかねばやまぬ。迷いたくても迷えんのである。魂がこちらこちらと教えるからである。

(夏目漱石『野分』十一　1907)

以上４例がヤム系の比較的古い用例であるが、全て「ネバ＋ヤマヌ」となっている。田中（2001）はナル系を江戸時代と明治初期で比べた際、「前部分については、「ズ系」から「ナイ系」への交替が、かなりはっきり浮かびあがってくる」(p.691) と指摘している。ヤム系においても同じことが言えるのではないだろうか。ヤム系の古い用例の前部分がズ系であるのは江戸時代の名残だと考えられる。

この４例に共通しているところは、異常な行動をせずにいられない、そこまでしないではいられないといった状況で使われている点である。(2a) は、本来烏はかあかあ、雀はちゅちゅと鳴くがそれが逆になったという状況である。(2b) は堕落した趣味を伝染させた者を「ペスト」「罪人」などと言っていることから、悪い行いであることがわかる。(2c) は病気にするだけでなく殺すまで気が済まないという文なので、悪い行いであると言える。また、「世間は〈略〉やまぬ」とあることから『手巾』の用例とよく似ている。そして (2d) は大なる理想のあるものの行動が常人とは違うということを述べている。

ナラナイ系は、選択可能性がないかあるいは低く、イケナイ系は選択可能性が高いという津田（2015）の説明を先に記したが、ヤム系の場合はどうか。異常な行動をせずにいられない、そこまでしないではいられないといった状況で使われていることを考えると、命題を絶対的に捉えているわけではなく、数ある選択肢の中から普通とは違うもの、良くないものを選択しているのではないだろうか。そのように考えた場合、ヤム系は選択可能性が高いと言える。

2.2 〈ナケレバヤマナイ〉形

ここでは前部分、後部分ともにナイ形が用いられた例について前節同様の確認をする。

(3a) 殺して見ると、厭でも応でも恐れなくっちゃいられなくなり、恐れると、どんなに避けようとしても悔恨の念が生じ、悔恨の念は是非共自殺させなければやまないように逼って来る。 (夏目漱石『創作家の態度』1908)

(3b) 力を商いにする相撲が、四つに組んで、かっきり合った時、土俵の真中に立つ彼等の姿は、存外静かに落ちついている。 けれどもその腹は一分と経たたないうちに、恐るべき波を上下に描かなければやまない。

(夏目漱石『思い出す事など』十九 1910-11)

(3c) 後から当時の記憶を呼び起した上、なおところどころの穴へ、妻から聞いた顛末を埋めて、始めて全くでき上る構図をふり返って見ると、いわゆる慄然と云う感じに打たれなければやまなかった。

(夏目漱石『思い出す事など』二十一 1910-11)

(3d) 僕の顔さえ見ると、きっと冷かし文句を並べて、どうしても悪口の云い合いを挑まなければやまない彼女が、一人ぼっちで妙に沈んでいる姿を見たとき、僕はふと可憐な心を起した。 (夏目漱石『彼岸過迄』須永の話 九 1912)

(3e) ことに、弁信法師から、真中の特別な一つの眼を授けられて以来というものは、父と母とから与えられている二つの眼が、むしろそれを見まいとして避ける場合にも、その一つだけが、パッカリとあいて、最後まで、それを凝視していなければやまないようです。 (中里介山『大菩薩峠』十六 1913)

(3f) そうして中味の不完全なために、お延がどんな疑いを起すかも知れないという事には、少しの顧慮も払わなかった。平生の用心を彼から奪ったこの場合は、彼を忽卒かしくしたのみならず彼の心を一直線にしなければやまなかった。 (夏目漱石『明暗』百二十二 1916)

(3g) そのことが貞二君をいらだたせ、粗暴にし、なにかしら突発しなければやまぬような、険悪な雲行きになっているところへ持上ったのが、昨夜の由紀子の変死事件であった。 (横溝正史『不死蝶』1953)

(3a) は、自殺とあるため異常な状況であることがわかる。(3b) は、腹が恐るべき波を描くとあり、尋常ではなく揺れていることを表わしている。(3c) は、慄然とあり、普通の状況でないことがわかる。(3d) は、彼女には僕の顔を見ると悪口の云い合いを挑むという習性があり、普通の態度とは言い難い。(3e) は、「二つの眼が、むしろそれを見まいとして避ける場合にも」真中の特別な一つの眼は「凝視していなければやまな

い」とあるため、見ると見ないの二つの選択肢が存在し、通常は見ないということがわかる。(3f) は、「平生の用心を彼から奪った」とあることから彼は通常の様子と異なることがわかる。(3g) は、「貞二君をいらだたせ、粗暴にし」とあり、貞二君も通常の様子と異なることがわかる。以上7例からヤム系が、異常な（普通とは違う）行動をせずにいられない、そこまでしないではいられないといった状況で使われているのは確かであろう。

2.3　固定的用法

ヤム系が滅びる前に用法の固定化が見られたため、それらの用例もここで挙げておく。

(4a) 私は利己主義の悪と醜さとをかくまで力強く鮮明に描いた作を他に知らない。また執拗な利己主義を窒息させなければやまない正義の重圧の気味悪い底力も、前者ほど突っ込んではないが、力を入れて描いてある。

（和辻哲郎『夏目先生の追憶』九　1917）

(4b) この武蔵の執拗性、徹底しなければやまない精神、これが、武蔵をして古今に独歩するほどの剣客につくりあげたのだが、これはひとり武蔵に、また剣道にかぎったことではない。　（海音寺潮五郎『赤穂義士』赤穂の巻　一　1955）

(4c) なにごとも徹底せねばやまぬ忠興のごときは沼田光友を殺そうとまで父に献言したが、父はおだやかにとめた。

（司馬遼太郎『国盗り物語』後編　小栗栖　1965）

(4d) 三島はその文学においても、必ず自己を主張しなければやまぬ人間であった。

（綱淵謙錠『斬』5　1972）

以上４例からわかるようにヤム系の比較的新しい用例は、〈名詞＋「ナケレバヤマナイ（連体形）」＋名詞〉の形をとっている。また、これらに共通して言えるのは人や物の性質を表している点である。その性質は様々あり、それらの内の1つを絶対的に捉えているのではなく客観的に述べているに過ぎない。よって、用法の固定化に伴って選択可能性はより高くなったと言える。

３．明治から大正にかけてのナル系とイク系の選択可能性

坂田・倉持（1993）[4]は、現代の「ナケレバナラナイ」と「ナケレバイケナイ」の違いについて、

「なければならない」は、ある事柄を個人の選択の余地を残さない、絶対的なものとしてとらえる判断、つまり、人間に与えられた宿命、社会的な制約、果たさざる

を得ない義務・責任など、そうする以外にない事態に応じた表現であり、一方、「なければいけない」は、ある事柄を、選択の余地の残された状況の中で、選択的にとらえる判断、つまり、必ずしもそうする必然性のない事態に応じた表現である、という傾向を認めることができる

と指摘している。つまり、現代ではナケレバナラナイは選択可能性が低く、ナケレバイケナイは選択可能性が高い。近代でも同じことが言えるのだろうか[5]。次に近代のナル系とイク系の用例から選択可能性の高低を確かめていく。まず「ナル系」の用例を見てみよう。

3.1 〈ナル系の用例　明治後半期〉

(5a) 早く食わぬか食わぬかと催促されるような心持がする。吾輩は椀の中を覗き込みながら、早く誰か来てくれればいいと念じた。やはり誰も来てくれない。吾輩はとうとう雑煮を食わなければならぬ。

(夏目漱石『吾輩は猫である』二　1905)

(5b) 脚を固い板の上に立てて倒して、体を右に左にもがいた。「苦しい……」と思わず知らず叫んだ。けれど実際はまたそう苦しいとは感じていなかった。苦しいには違いないが、さらに大なる苦痛に耐えなければならぬと思う努力が少なくともその苦痛を軽くした。　(田山花袋『一兵卒』1907)

(5c) この冬に肺を病んでから薬一滴飲むことすらできず、土方にせよ、立ちん坊にせよ、それを休めばすぐ食うことができないのであった。「もうだめだ」と、十日ぐらい前から文公は思っていた。それでもかせげるだけはかせがなければならぬ。　(国木田独歩『窮死』1907)

(5d) よしんば二十五円に十円ふえたらどれだけの贅沢ができる。――みんな欲で欲には限りがない――役目となれば五円が十円でも、雨の日雪の日にも休むわけにはいかない、やっぱり腰弁当で鼻水をたらして、若い者の中にまじってよぼよぼと通わなければならぬ。オヽいやな事だ！というのである。

(国木田独歩『二老人』上　1908)

(5e) そこで自分は暗い中に立ち留って、カンテラの灯を見詰めながら考えた。往きには八番坑まで下りて行ったんだから帰りには是非共電車の通る所まで登らなければならない。　(夏目漱石『坑夫』1908)

以上が明治後半期ナル系の用例である。明治後半は前部分はナイ系が多く、後部分は後部分はナル系の中でも「ナラヌ」が多い。用例を一つずつ見ていくと、(5a) は「と

うとう雑煮を食わなければならぬ」のように「とうとう」という語が使われ、雑煮を食うのが最後の手段で選択の余地が無いことがわかる。(5b) は脚気を患う兵士が疼痛に悶える場面である。軍医がおらず、即死するわけでもないため、苦しむほかない状況といえる。(5c) は生きていくためには稼ぐしかないため、選択の余地は無い。(5d) は「オヽいやな事だ！」とあるように、望んでそうしたいわけではないがせざるを得ないという状況で「なければならぬ」が使われている。(5e) は「是非共」という語から、帰るためには電車の通る所まで登ることが絶対条件だとわかる。次に大正期のナル系の用例を見ていく。

3.2 〈ナル系の用例　大正期〉

(5f) B　(絶望して) どうしても己は死ななければならないのか。ああどうしても己は死ななければならないのか。男　お前は物心がつくと死んでいたのも同じ事だ。　(芥川龍之介『青年と死』1914)

(5g) 見栄の強い津田は手紙の中に書いてある事を、結婚してまだ間もない細君に話したくなかった。けれどもそれはまた細君に話さなければならない事でもあった。　(夏目漱石『明暗』六　1916)

(5h) それから彼をこの世界と別れさせるようにした、あらゆる人間や事件が恨めしかった。それからどうしてもこの世界と別れなければならない彼自身が腹立しかった。　(芥川龍之介『首が落ちた話』上　1918)

(5i) サアカスがあるのは芝浦である。歩くにしてもここからは、神田橋の方へ向って行かなければならない。　(芥川龍之介『葱』1920)

(5j) 試みに目をふさいで一日だけがまんができますか、できますまい。それを年が年じゅう死ぬまでしていなければならないのだから、ほんとうに思いやるのもあわれなほどでしょう。　(有島武郎『燕と王子』1926)

大正期は、前部分ナイ系の「ナケレバ」と後部分ナル系の「ナラナイ」が優勢だった。(5f) は死ぬという人間の宿命を表現している。(5g) の手紙は津田の父からで、今月は送金出来ないという内容である。津田は入院費の工面に困っていたため、不本意ながら妻に話さないわけにはいかないという場面である。(5h) は自分の意思とは反対に世界と別れる状況であり、さらに「どうしても」という語から絶対的であることがうかがえる。(5i) は、場所や方角は変わるものでは無いため絶対的である。(5j) は目が見えない状況を説明しており、再び見えるようになるという選択肢はない。

明治・大正期のナル系が使用される状況は以下の通りである。

・「とうとう」「是非共」などが共起しやすい、選択の余地が無い場合

・死など自然の摂理

・自らそうしたい、そうする必要があると思っているわけではないが、そうせざるを得ない場合

よって、明治・大正期におけるナル系も現代と同じく、選択可能性が低いもしくは無いと言える。続いてイク系の用例を見ていく。

3.3 〈イク系の用例　明治後半期〉

(6a) 最初は今申した妹と背かゞみ、それを貸して呉れた男の曰く、この本は気を付けて考へて読まなくてはいけないよと、特にさう言はれたからビクビクもので読んで見た。（泉鏡花『いろ扱ひ』1901）

(6b) もしボールが飛んだら表から廻って、御断りをして取らなければいかん。（夏目漱石『吾輩は猫である』八　1907）

(6c) 「僕は性質だと思うがね」「いや、病気ですよ、少し海岸にでも行っていい空気でも吸って、節慾しなければいかんと思う」（田山花袋『少女病』三　1907）

(6d) 「いったい何を話していたのかな」「結婚の事です」「結婚？」「ええ、私が母の言うことを聞いて……」「うん、そうそう。なるべくおっかさんの言うことを聞かなければいけない」と言ってにこにこしている。（夏目漱石『三四郎』七　1908）

(6e) こういうのは私一人かも知れませんが、世の中は自分を中心としなければいけない。（夏目漱石『無題』1910）

明治後半期イク系の用例にも、前部分ズ系はほとんど見られなかった。(6a) は、本を読む場合、流し読みや最初から最後まできちんと読まないなど様々な読み方が想定されるが、その中でも「気を付けて考へて」読んだ方が良いというアドバイスをしている。(6b) は必ずしもそうする必要があるわけではないが、マナーとして断りをいれた方がより良いという判断である。(6c) は、節欲する必要があるとは思っていない僕に対して、その必要性を判断し伝えている。(6d) は、「なるべく」という語が使用され、強制的ではなく可能な限りそうした方が良いという判断である。(6e) は「こういうのは私一人かも知れませんが」とあるように、他の意見があることを認識した上で個人的な意見を述べている。次に大正期のイク系の用例を見ていく。

3.4 〈イク系の用例　大正期〉

(6f) その上私は色々世話になるという口実の下に、お嬢さんの気に入るような帯か反物を買ってやりたかったのです。それで万事を奥さんに依頼しました。奥さんは自分一人で行くとはいいません。私にもいっしょに来いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないというのです。

(夏目漱石『こころ』下　先生と遺書　十七　1914)

(6g) その中には、「どうもまだ、からだの具合が悪い、それにつけても葡萄酒はつつしまなければいけない」と書きつけたところもあった。

(島崎藤村『新生』第二巻六十　1918)

(6h) 先生は、もう少し先生らしくしなければいかんと思いますね。

(賀川豊彦『空中征服』四三　カフェー・アブナイ　1922)

(6i) そうすると予備隊は、お前たちの行った跡から、あの界隈の砲台をみんな手に入れてしまうのじゃ。なんでも一ぺんにあの砲台へ、飛びつく心にならなければいかん。　(芥川龍之介『将軍』一　白襷隊　1922)

(6j) 私達子供はおとなしくしていなければいけないような気がしたのだった。

(豊島与志雄『黒点』1926)

(6f) は元々一人で行こうとしていた私に対し、お嬢さんのいっしょに行く必要があると言っていることから、いくつかの選択肢から判断を下している。(6g) は、葡萄酒を飲むという選択肢と飲まないという選択肢がある。(6h) は先生らしくない人に対し、もっと先生らしくした方が良いという進言をしている。(6i) は「砲台へ、飛びつく心」でない人間に対してその必要性を判断している。(6j) は騒がずに大人しくするという選択をしている。

以上の用例から、明治・大正期におけるイク系が使用される状況をまとめる。

・数ある選択肢からより良いものを判断している場合

・必ずしもそうする必要がない場合

・相手の考えや状態とは異なることを伝える場合

したがって、明治・大正期のイク系も現代同様に、選択可能性が高いと言える。

まとめ

本研究で明らかとなった、近代から現在にかけての当為表現形の使用時期と意味的差異を以下の〈表〉にまとめた。(※は当為表現の後部分を表す。)

明治後半期、当為表現はナル系が中心で、他にはヤム系・スム系が使用されていた。

〈表〉 近代以降の当為表現形の意味的差異と移り変わり

※ 述べ方 / 選択可能性 / 時代	ナル系	スム系	ヤム系	イク系
	客観的			主観的
	低		高	
明治	ナケレバ ナラヌ ↓ ナケレバ ナラナイ	スマナイ①	ネバヤマヌ ↓ ナケレバ ヤマナイ	スマナイ② ナケレバ イカン ↙ ナケレバイケナイ
大正				
昭和 ⋮				

そして、明治後半期から大正にかけてイク系が少しずつ使われ始める。ナル系とスマナイ①[6]は共に選択可能性が低く客観的な性質であり、「ナケレバスマナイ」は昭和以降衰退した。別タイプのスマナイ②[7]は選択可能性が高く主観的な性質である。今回の研究の中心であるヤム系は、異常な行動をせずにいられない、そこまでしないではいられないといった状況で使われていることを考えると、命題を絶対的に捉えているわけではなく、数ある選択肢の中から普通とは違うもの、良くないものを選択している。したがって、選択可能性が高く客観的なため、主観的な要素が無い分をスマナイ②が補っていたことが考えられる。明治大正でのスマナイ②は「なければすまない＋気がする」という使われ方が非常に多く、ほぼ同義の「気が済まない」に吸収され現在に至るのではないだろうか。ヤム系も「～せずにいられない」といった意を表すため、同時期に似たような表現形が多く存在していたことがわかる。ヤム系とスム系が滅びた昭和以降、イク系は主観性だけではなく、客観的な規則もカバーするようになった[8]。形の面では、前部分については江戸期に主流であったズ系（ネバ）の名残が明治後半期に少し見られるが、主流はナイ系（ナケレバ等）である。後部分は、明治から大正期にかけてナラヌやヤマヌからナラナイやヤマナイへと移り変わった。

おわりに

本稿では、「ナケレバヤマナイ」という形式を、選択可能性という観点で近代における当為表現と関連づけ、その意味的差異を調査してきた。これまでの当為表現に関する研究は現代が中心であり、江戸期・明治期の研究でも専ら「ナケレバナラナイ」と「ナケレバイケナイ」が取り上げられていた。今回、こうした当為表現の主流ではない「ナケレバヤマナイ」の意味を明らかにすることで、近代の当為表現それぞれの関連性がより明らかになったのではないだろうか。「ナイデハオカナイ」などその他の表現について、いかに当為表現として位置付けるかは今後の課題である。

注

(1) 『日本国語大辞典』には、「いつまでも…する。…しないではいられない。」と語釈が記載されている。

(2) 当為表現の先行研究において、田中（2001）は「江戸語から東京語にかけての当為の表現として「(動詞）＋ネバナラナイ」「(動詞）＋ナケレバナラナイ」類の言い方は、きわめて変化に富んでいる」と指摘し、この種の表現形式を全て「当為表現」とした上で、それらの変化・変遷を明らかにしているが、ほぼナル系とイク系の話で、ヤム系には触れていない。（田中章夫（2001）『近代日本語の文法と表現』明治書院（p.679））

(3) 津田香織（2015）「当為を表す４つの形式の意味・語用論的差異について ―コーパスによる検証―」筑波大学大学院人文社会科学研究科『国際日本研究』第７号

(4) 坂田雪子・倉持保男（1993）『教師用日本語教育ハンドブック４　文法Ⅱ　改訂版』凡人社

(5) 先行研究、津田（2015）で用いられた例は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ)」によるもので、1971年以降の書籍等が対象であるため、近代における用例での検証はまだ行われていない。

(6) 「済む」の意味のうち、「物事が終わる。完了する。できあがる。成る。物事が決着する。かたづく。（日本国語大辞典)」という語釈で分類されるタイプ。

(7) 「済む」の意味のうち、「気持の上で満足する。気持がはれる。気にいる。納得する。」もしくは「他人に対して義理がたつ。申しわけがたつ。（日本国語大辞典)」という語釈で分類されるタイプ。

(8) 以下が昭和以降の客観的な規則を表すイク系の用例である。

それだから中学校に入るのにも、階級の低いものの子は入れなかった。 だから中学へ入るのでも、養子に行って入るとかしなければいけなかった。

（宮本百合子『ソヴェト・ロシアの素顔』1931）

ずっと前に二回だけ新人賞の候補になっただけじゃないの。たったそれだけのことでどうしてそんなに偉そうにしなければいけないのよ。　（筒井康隆『大いなる助走』1977）

例文を引用した資料

『赤穂義士』1974年　講談社（講談社文庫）、『現代日本文学大系〈5〉樋口一葉　明治女流文学　泉鏡花集』1972年・『現代日本文学大系〈43〉芥川龍之介集』1985年　筑摩書房、『斬』1972年　文藝春秋（文春文庫）、『新生（下）』1955年・『国盗り物語（四）』1971年　新潮社（新潮文庫）、『新日本古典文学大系　平家物語　下』梶原正昭・佐竹昭広校注　1993年　岩波書店、『大菩薩峠』1995年・『芥川龍之介全集』1986～1987年・『夏目漱石全集』1987～1988年　筑摩書房（筑摩文庫）、『豊島与志雄著作集〈第2巻〉小説』1965年　未来社、『蒲団・一兵卒』1969年・『一房の葡萄』1952年・『三四郎』1951年　角川書店（角川文庫）、『和辻哲郎随筆集』1995年・『号外・少年の悲哀』1939年・『漱石文明論集』1986年　岩波書店（岩波文庫）

参考文献

井島正博（2013）「当為表現の構造と機能」『日本語学論集』９号　pp.133-173

王慈敏（2015）「現代日本語における価値判断のモダリティに関する研究」千葉大学大学院人文社会科学研究科　博士論文

郷丸静香（1995）「現代日本語の当為表現：「なければならない」と「べきだ」」『三重大学日本語学文学』巻６　pp.29-39

坂田雪子・倉持保男（1993）『教師用日本語教育ハンドブック４　文法Ⅱ　改訂版』凡人社

渋谷勝己（1988）「江戸語・東京語の当為表現―後部要素イケナイの成立を中心に―」『大阪大学日本学報』７　pp.99-119

田中章夫（2001）『近代日本語の文法と表現』明治書院

津田香織（2015）「当為を表す４つの形式の意味・語用論的差異について―コーパスによる検証―」筑波大学大学院人文社会科学研究科『国際日本研究』第７号

森山卓郎（1997）「日本語における事態選択形式―『義務』『必要』『許可』などのムード形式の意味構造―」『国語学』第188集　pp.123-110

山西正子（2001）「現代語における当為表現」『目白大学人文学部紀要 言語文化篇』第七号　pp.120-110

湯浅彩央（2002）「関東地方における当為表現―史的変化・分布からの一考察」『論究日本文学』77 pp.37-54

湯浅彩央（2007）「国語教科書における当為表現の変化―明治から昭和二〇年代にかけて―」『論究日本文学』86　pp.13-26

李長波（2014）「明治時代の東京語資料としての Clay MacCauley 著『日本語入門』」『同志社大学日本語・日本文化研究』第12号　pp.29-52

（2017年度卒業）